

お お た に こ ふ ん ぐ ん
大 谷 古 墳 群

JA掛川市緑茶加工施設用地造成事業に先立つ緊急発掘調査報告書

1994

掛川市教育委員会

例 言

1. 本書は、静岡県掛川市千羽1290-2外における掛川市農業協同組合緑茶加工施設用地造成事業に先立ち、平成5年7月12日より同年8月24日にかけて実施した大谷古墳群の発掘調査報告書である。
2. 今回の調査は、「J」A掛川市緑茶加工施設用地造成事業に先立つ埋蔵文化財発掘調査事業」として、掛川市農業協同組合の委託により、掛川市教育委員会が受託し調査を実施した。
3. 現地の発掘調査は、掛川市教育委員会学芸員前田庄一と学芸員大熊茂広が担当した。
4. 現地作業ならびに整理作業では、次の方々の参加を得ている。
石山総壽朗 石山みちち 岡本鶴子 岡本暁美 榛葉せつ 石川きょう 石川とみ 大石君代
仲林はな 榛葉豊子 戸塚智美 清光真由美
5. 本書の執筆・編集は掛川市教育委員会の大熊が行なった。
6. 発掘調査業務は、掛川市教育委員会教育長大西珠枝・社会教育課長榛葉稔・社会教育課文化係長澤村久雄のもとに社会教育課が所管した。
7. 調査によって得た資料は、すべて掛川市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 本文、挿図中で使用した地点名は現地調査時のままである。
2. 挿図における方位は、磁北を示す。(1993年8月現在)
3. 本書で使用した遺構名称は、**S F**が土壌を、**S D**が溝状遺構を表す。
4. 遺物の番号は、挿図と写真図版と同一である。

目 次

I	発掘調査と遺跡の概要	
1.	調査に至る経過と調査の目的	1
2.	調査の方法と経過	1
3.	遺跡をめぐる環境	3
II	調査の内容	
1.	遺 構	7
2.	遺 物	11
III	ま と め	12

I 発掘調査と遺跡の概要

1. 調査に至る経過と調査の目的

静岡県は茶所として名高いが、掛川市もお茶づくりが盛んであり、全国屈指の生産高を誇る。茶摘みの頃には、地区ごとにある緑茶工場が、茶葉の入った白い袋を満載したトラックの出入りで賑わう。今回の調査の契機となったのは、その緑茶工場の建設用地の造成工事である。



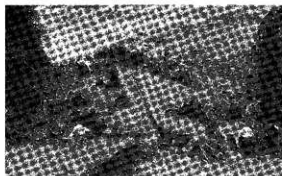
No1・3地点調査前風景(東より)

平成5年4月に掛川市農業協同組合並びに掛川市役所土木課より、緑茶工場建設に伴う用地造成、並びにその関連事業として市道千羽木割線の新設を行ないたく、当該地における埋蔵文化財所在の有無とその取り扱いについて掛川市教育委員会に問い合わせがあった。当該地には大谷横穴群の存在が知られており、また、尾根の上には古墳等の存在も考えられた。そこで、横穴群の広がり、古墳等の存在を知るために、現地踏査を行なった結果、大谷横穴群を含む計12地点の遺跡の存在が考えられた(第2図参照)。そのうち、横穴群は同じ谷に臨んで3地点、少なくとも20基は存在しているものと思われた。12地点のうち、今回の工事範囲外であるNo2地点と従前より横穴墓の所在を確認しているNo12地点を除くその他の地点について、平成5年5月19日～6月8日に確認調査を行ない、No1・3・7地点で遺構・遺物が確認され、またNo11地点では16基の横穴墓が確認された。

したがって、本調査が必要とされたのは、市道建設に係るNo1・3・12地点と緑茶工場建設に係るNo7・11地点となったが、掛川市教育委員会と掛川市農協並びに市土木課の協議の結果、工事計画の見直し・変更がなされた。そして、調査の対象からNo11・12の横穴墓群は外され、No1・3・7の3地点において、記録保存を目的とした調査が実施された。

2. 調査の方法と経過

今回の調査はNo1・3地点とNo7地点に離れており、各々に調査杭を設定した。現地での作図はこの杭を使い行なった。



No1地点作業風景(東より)

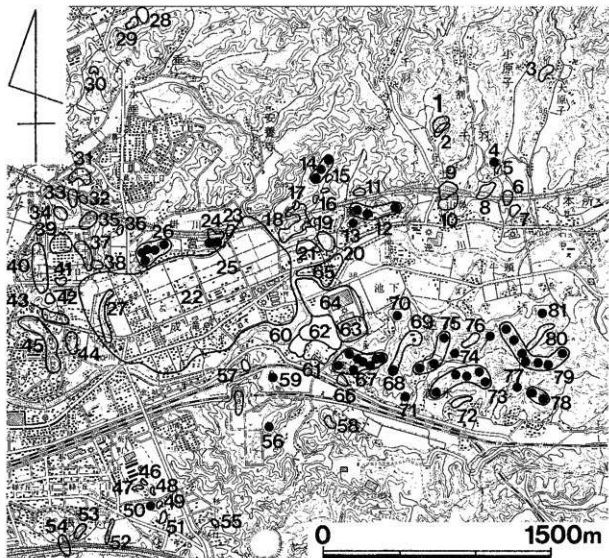
現地での図面は、遺構土層断面は10分の1縮尺で、遺物出土位置図は20分の1縮尺で作成した。

写真撮影は、プロニーサイズ(6×7)原画白黒、35mmサイズ原画白黒・カラーリバーサルを使用した。

さらに、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影・測量を行い、それを基に40分の1縮尺で調査地全体図をNo1・3地点とNo7地点で各々作成した。

以下、調査の経過をしるす。

平成5年7月12日～20日	No7地点	人工による表土除去・確認面検出、写真撮影
7月21日	No7地点	空中写真撮影
8月9日～8月23日	No1・3地点	人工による表土除去・遺構確認、写真撮影、実測
8月24日	No1・3地点	空中写真撮影



第1図 遺跡の位置と周辺遺跡分布図

1. 大谷古墳群 2. 大谷横穴群 3. 鍛谷横穴群 4. 中屋敷古墳 5. 中屋敷横穴群 6. 宮ノ前 7. 吉松 8. 後沢 9. 郷ト 10. 往環北 11. 御堂ヶ谷横穴群 12. 正源庵古墳群
13. 五平屋敷古墳群 14. 深谷古墳群 15. 深谷横穴群 16. 谷通横穴群 17. 山郷横穴群 18. 元屋敷 19. 神明横穴群・谷通横穴群 20. 寺峰 21. 古明 22. 山口 23. 山郷山横穴群 24. 山郷山 25. 山郷山古墳群 26. 宮脇古墳群 27. 堀之内 28. 谷ノ坪Ⅱ 29. 谷ノ坪Ⅰ 30. 大竹横穴群 31. 大多郎古墳群 32. 大多郎 33. 内蔵 34. 宝田 35. 大平山・大平山古墳群 36. 西田 37. 西山古墳群 38. 西田横穴群 39. 大ヶ谷・火ヶ谷古墳群 40. 御所原 41. 大ヶ谷横穴群
42. 三条久保・三条久保古墳 43. 井屋ノ谷 44. 葛川西田 45. 妙見山古墳群 46. 大境横穴群 47. 長久院横穴群 48. 会下ノ腰横穴群 49. 塩辛山横穴群 50. 塩辛山古墳 51. 茶屋辻横穴群 52. 京徳横穴群 53. 鶴本横穴群 54. 欠崎横穴群 55. セツ枝横穴群 56. 蛭田古墳 57. 大六山 58. 日陰谷 59. 蛭田口行人塚 60. 中西 61. 高畑 62. 天神 63. 堂下 64. 神子地 65. 下川原 66. 畑中 67. 南郷古墳群 68. 宮ヶ谷行人塚 69. 踊原 70. 前田古墳 71. 正福寺古墳 72. 原山 73. 深谷古墳群 74. 大久保古墳群 75. 山郷古墳群 76. 大久保 77. 山ノ段古墳 78. 一色古墳群 79. 大蔵古墳群 80. 大蔵 81. 蔵人谷古墳

3. 遺跡をめぐる環境(第1図)

大谷古墳群は掛川市の中心街から東へ約4km、国道1号線より北へ約0.6km、国道1号線掛川バイパスの千羽インターチェンジより北へ約0.4kmの場所に位置する。開析谷を挟んだ向かいの丘陵地は現在エコポリスと呼ばれる工業団地がある。

掛川市の市街地は、逆川・倉真川の形成した沖積地に広がっている。そして、それらの川は丘陵地を浸食して多くの開析谷を作った。大谷古墳群の立地するのは、逆川の支流、千羽川・木割川により開析された丘陵地である。ちなみに、その丘陵地の南先端部の周辺地域は山鼻(やまはな)と呼ばれているが、これは北方の粟ヶ岳(標高527.3m)から山続きであり、その山の先端・山の端(はな)に当たることからくる呼称であるという。

次に、大谷古墳群をめぐる弥生時代・古墳時代の歴史的環境を概観したい。大谷古墳群周辺の遺跡分布は比較的濃密であるが、発掘調査例は少なく、現在のところ資料不足の感は否めない。そこで、「掛川市遺跡地図」「掛川市遺跡地名表」を主に用いて概観することとしたい。

まず、弥生時代中期の遺跡として、8後沢遺跡・39大ヶ谷遺跡・66畑中遺跡がみられる。大ヶ谷遺跡が昭和57年に調査され方形周溝墓4基が検出されているほかは、未発掘であり詳しい内容はわからない。続く弥生時代後期になると遺跡の数は急激な増加をみせる。大谷古墳群付近では、7吉松遺跡・9郷下遺跡が弥生時代後期、6宮ノ前遺跡・8後沢遺跡・10往還北遺跡が古墳時代前期まで及ぶとされている。立地は沖積地とそれを望む丘陵地である。いずれも未発掘のためその内容は不明であるが、この時期の調査例として、逆川左岸の丘陵上に立地する57大六山遺跡をあげておく。昭和57・58年度の調査で弥生時代後期から古墳時代前期にわたる竪穴住居跡25軒、方形周溝墓16基、その他土壊・土器棺等が検出された。

和田岡原に和田岡古墳群の形成が始まる古墳時代中期になると、集落跡とされる遺跡の数は大きく減少する。さらに古墳時代後期とされるものも数少ない。しかし、古墳時代中期とされる25山郷山古墳群・26宮脇古墳群等をはじめ、古墳群の形成が後期に及んでみられるため、それらを墓域とした集落が存在していたはずであり、未だ発見されていないだけであろう。そして、それらの集落は恐らく平野部に所在しているものと思われる。数少ない古墳時代後期の調査例として、前述の大六山遺跡の平成5年度の調査があり、6世紀後半から7世紀にわたる、竈を持ち、重複のみられる竪穴住居跡が20戸ほど検出されている。さらに、沖積地に立地する22山門遺跡からは、古墳時代後期から奈良・平安時代にかけてつくられた直線的な溝が7本検出され、生産路の一端をうかがわせた。また、古墳時代後期の特徴的な事象として横穴墓の造営が始まることあげられる。大谷古墳群周辺の横穴群は3畹谷横穴群・5中屋敷横穴群等、千羽・園ヶ谷地区と、53鶴本横穴群・54矢崎横穴群等、上張・杉谷地区にまとまった分布がみられるが、その広がり・内容等が知られるものはやはり少ない。大谷横穴群は、大谷古墳群と同じ丘陵地を利用している。前述のとおり当初の予想を上回る数の横穴墓の存在が確認された。横穴群の調査例として、大谷横穴群・古墳群とは逆川を挟んで南方約3kmに位置する、53鶴本横穴群・54矢崎横穴群の調査があり、計12基の横穴墓が発見されている。

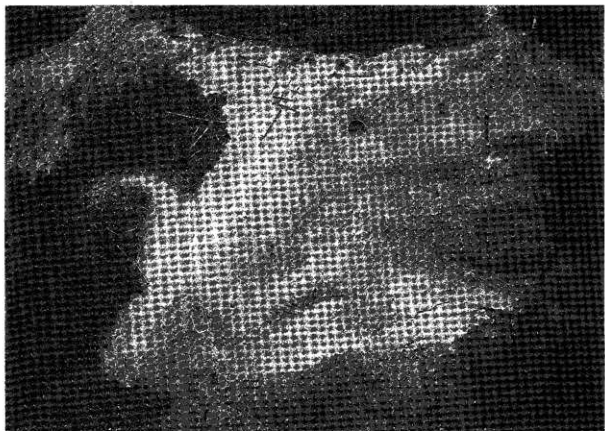
- 〔参考文献〕 斎田茂先編 『掛川誌稿(全)』 名著出版 1972
『掛川市遺跡地図』 掛川市教育委員会 1982
『掛川市遺跡地名表』 掛川市教育委員会 1981



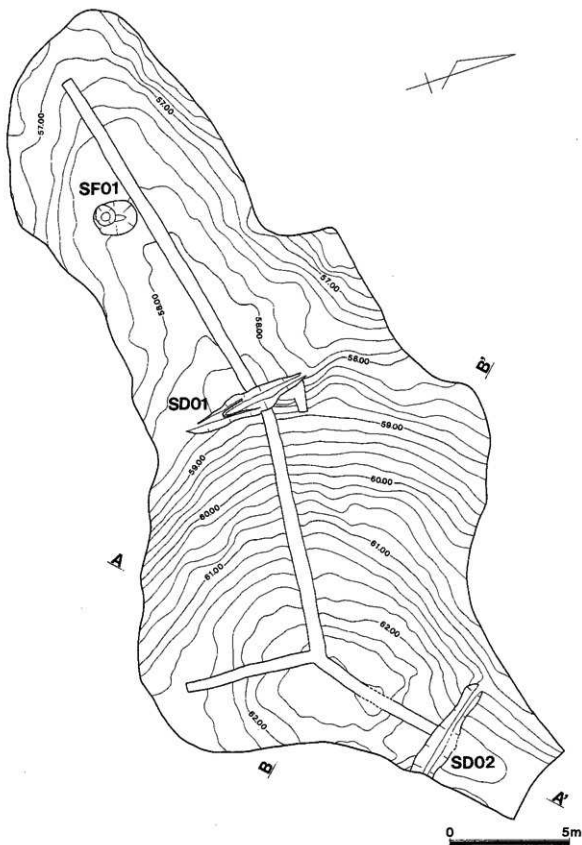
第2図 遺跡周辺地形図



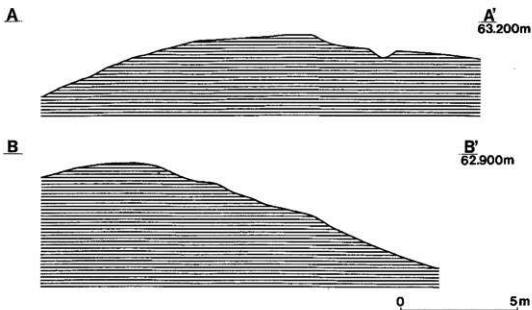
No 1・3地点全景（北より）



No 7地点全景（南より）



第3図 No1・3地点全体図



第4図 No3地点断面図

II 調査の内容

1. 遺構

1) No1・3地点

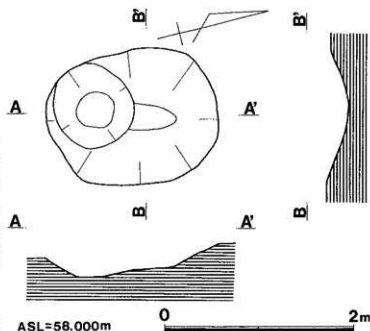
SF01 (第5図)

No1地点とした、平坦面の幅が10m 足らずの尾根上で検出している。平面形は隅丸方形に近い楕円形で、直径は長径が1.8m、短径が1.4mをそれぞれ測る。確認面からの深さは約10cmと浅い。覆土は黄色味を強く帯びた暗茶褐色土で、しまりにやや欠ける。

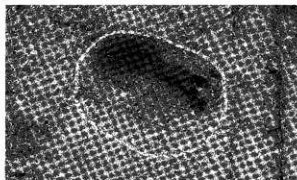
遺物は、覆土中より土器片が多数、かなり乱れた状態で出土している。ほとんどの破片は同一個体であると思われるが、復元はできなかった。器面は著しく荒れており、調整等もはっきりしないが、弥生時代後期～古墳時代初頭に位置付けられるものであると思われる。

SD01 (第6図)

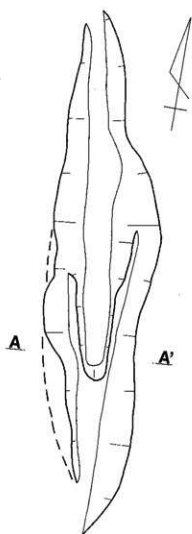
No3地点の西側山裾に位置する。幅1.2m、深さ0.5mを測る。当初は山裾に沿って、ある程度の長さで廻るのではないかと考えられたが、SD02と同じく直線的に掘られており、6m程の長さ



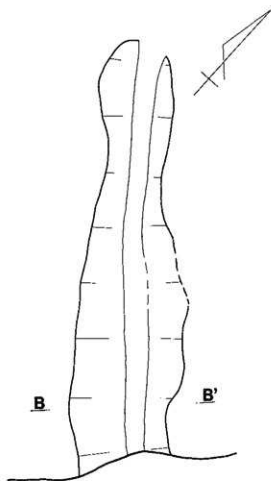
第5図 SF01実測図



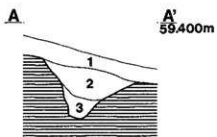
SF01完掘状況 (東より)



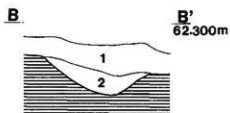
SD01



SD02



1. 黄褐色土
2. 茶褐色土
3. 淡黄褐色土



1. 黄褐色土
2. 茶褐色土

0 2m

第6图 SD01·02实测图

で終わってしまう。底面は10cm程度の段差があり傾斜は南から北へ40cm程度認められるが、概ね平坦に作られている。

覆土は、上層がやや黄色味を帯びた茶褐色土、下層は淡黄褐色土で、いずれも砂質を強く帯びており、しまりにやや欠けている。

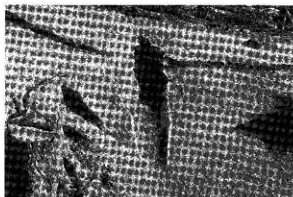
遺物の出土はなかった。

SD 02 (第6図)

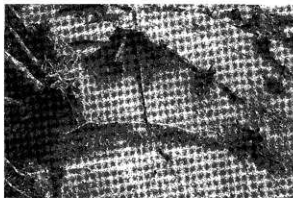
No 3地点とNo 4地点の間の尾根を直交し切断するように南北に掘られている。幅は0.7m、長さ3m、深さ0.3mを測る。平面径は木の根などの攪乱を受け、若干乱れているが、底面の形状をみると概ね直線的である。また、底面の傾斜はくぼは平らである。

覆土はやや暗く黄色味を帯びた色調の茶褐色土上で、砂質を強く帯び、しまりに欠ける。

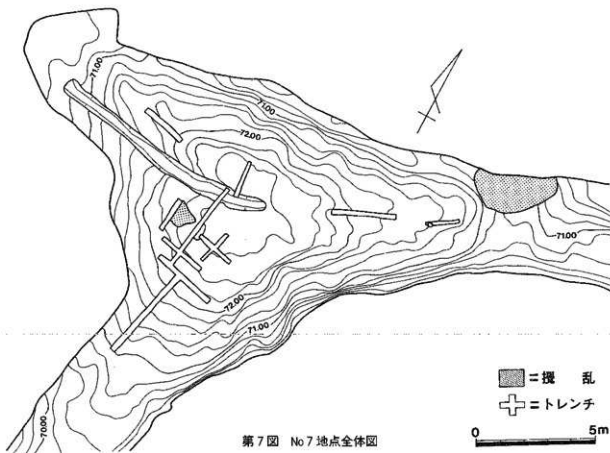
遺物は土師器破片が底面と覆土中より一片づつ出土している。

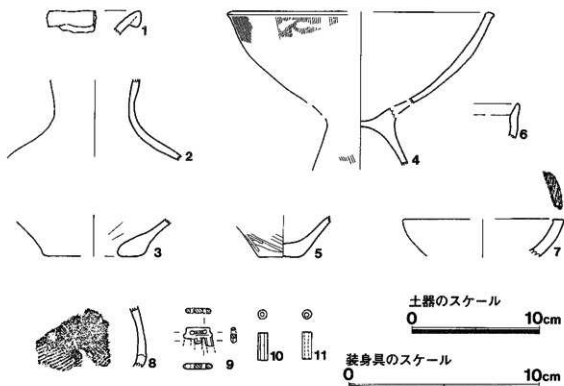


SD 01完掘状況 (東より)

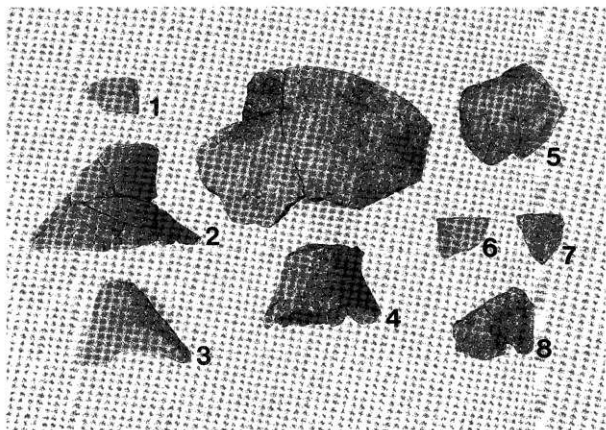


SD 02完掘状況 (北より)





第8図 出土遺物実測図



出土遺物1 (土器)

2) No7地点

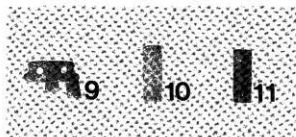
当該地点においては東西方向の遺状遺構が尾根上に検出されている。幅は0.6m程で、約10mの長さで確認している。遺物は検出していない。

その他、遺構にともなうものではないが、北側の斜面において壺形土器と思われる胴部破片（第8図8）が1点、また尾根上より性格不明の石製品1点（第8図9）と管玉2点（第8図10・11）が出土している。

2. 遺物（第8図）

今回の調査において出土した遺物は少なく、テンバコ1箱にも満たない。

1～3はNo1地点SF01から出土したものである。1は折り返しにより成形されているI緑部破片、2は頸部～肩部にかけての破片で、なめらかに屈曲する。3は穿孔のみられる底部破片である。これらは、胎上・焼成



出土遺物2（装身具）

・色調などの共通点から同一個体であると考えている。器面の荒れが著しく、調整は不明であるが、3の内面にわずかにヘラ状工具の圧痕と思われるものが観察できた。折り返し口縁であること、図示はできなかったが屈曲のみられる胴部破片があることなど器形の特徴から、菊川式の範疇に入るものと思われる。4～7はNo3地点から出土したものであり、うち4・5は確認調査時のトレンチ内より検出したものである。4はNo3地点頂上部から出土した高坏形土器である。坏部は4分の1ほど残存しており、脚部は全周残っていたが、裾は欠損していた。また、坏部と脚部は、同一個体であるが直接接合ができなかった。ゆるやかに内湾しながら立ち上がる坏部は外面上半に稜をもつが屈曲度は小さい。口唇端部は面をもつ。調整は縦位のハケ目が一部に残っている。5は斜面より出土した、小型の壺形土器の底部である。底は若干のゆがみがみられ、円形というより多角形のように整形されている。底径は3.3cmを測る。立ち上がりは、やや外反しながら逆ハの字に広がっている。調整は横位のミガキがややランダムに施されている。6はNo3地点の東側尾根の北側肩部、SD02から約2mの地点で出土した、土師器碗口縁部の小破片である。断面は緩やかなS字を描く。内面には稜をもつ。器面の荒れが著しく、調整は不明。胎上には径0.5cm以下の砂粒の混入がみられるが少なく緻密である。7は頂上部の3本のトレンチが交わっている部分の北側から出土している、壺形土器のI緑部小破片である。内湾が強くみられ、I唇端部は、はっきりした面をもち、縄文を施している。口径は推定で12.6cmを測る。8の土器片と9～11の装身具はNo7地点からの出土遺物である。8は壺形土器の胴部破片である。外面は輪積み痕を大体の境にして上方に斜位のハケを、下方に単筋の縄文を施している。9は性格不明の石製品である。幅1.5cm、厚さ0.25cmを測る。材質は滑石で淡緑色を呈す。穿孔が2つ並んであり、お互いに向かって、紐との摩擦による挟れが両面にみられ、吊されて使用されていたことがうかがえる。また、片面だけに横方向の擦痕がみられる。欠損しており元の姿はわからないが、類別として、静岡県焼津市小深田遺跡から出土した石製品がある。静岡県史資料編3に、異形琴柱形石製品として紹介されているが（注1）、焼津市では垂飾品とされているようである（注2）。幅2cm、長さ2.8cm、厚さ0.4cmと、本遺跡のものよりやや大きい。穿孔を2つもち、その下に縦長のすかしを2つ空け、さらに下半は三日月を平らにつぶしたような形態で、三日月型のすかしを2つ並べ

で空けている。穿孔のある部位に横方向に直線が3本、穿孔のある部位とすかしの段の間に鋸歯文が、両面に、いずれも線刻されている。形態的に剣形石製品と勾玉の要素が考えられるとされている。滑石製で色は黒味の強い濃緑色である。住居内から出土しており、4世紀後半の年代とされている。本遺跡からのものと見比べてみると、小深田遺跡のものは上部のくびれがはっきりしている、線刻による鋸歯文がみられる、厚さが約2倍ある、などが違いとしてあげられる。一方、穿孔を2つ、すかしを2つもつことなど、形態の類似性が強うかがえる。また、穿孔の間の3本の痕跡は線刻の名残とも思える。よって、断定はできないが、2つは同一種のものであると思われる。しかし、本遺跡のものは、鋸歯文が表現されないこと、つくり若干の簡略化がみられることなど、小深田遺跡のものに比べて退化傾向がうかがえ、後出するものである可能性が高い。時期を積極的に決定できる材料に乏しいが、やはり4世紀後半に位置付けられようか。10・11はどちらも滑石製と思われる管玉である。10は長さ1.5cm、外径は0.5cmを測り、色調は淡緑色を呈す。片側から穿孔されている。11は長さ1.4cm、外径0.5cmを測り、色調は濃紺色を呈す。穿孔は両側から行われている。

註1 「静岡県史」資料編3 考古3 静岡県 1992

註2 「焼津市歴史民俗資料館年報Ⅰ」 焼津市歴史民俗資料館 1987

Ⅲ ま と め

No1地点から検出したSF01は、尾根上にひとつだけ存在すること、底部穿孔された菊川式の壺の出土したことなどから、弥生時代後期～古墳時代初頭の時期の土壌墓であると考えている。

次に、No3地点は、頂上部から高坏(第8図4)が、あたかもそこに置かれたように出土していること、そのほか土師器小破片(ほとんどが図化不可能)が散在してみられることから、この高まりにおいて何らかの行為が行われたことは確かなことであると思われる。また、東西からNo3地点を挟むように検出したSD01・02の存在は、No3地点の区画を意味し、外界との隔絶を示すものではないかと思われる。No3地点は調査当初、古墳であることを想定しており、上記の遺構・遺物の検出はそれを裏付ける材料のように思える。しかし、古墳とするに最も重要であろう埋葬主体部を検出できなかったために、No3地点が古墳であることをはっきりいえない。また、SD01・02について、その直線的な平面形態と規模は、No3地点の高まりを墳丘とすると、やや不釣り合いな印象を受ける。また、頂上部を中心とするなら、その位置がずれている点も気になる。そのため、ここではNo3地点について、SD01・02の検出と土師器の出土から、外界から隔絶された空間で土器を使った何らかの祭祀的行為が行われた場所であろうとするに止める。

また、No7地点からは、遺物として滑石製垂飾りと管玉が出土しているが、これも、祭祀的要素が強いと思われるものである。

以上のことから、ここは、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての祭祀の場として使われていたことが考えられる。そして、同じ丘陵の南側斜面に大谷横穴群の造営がみられることは、この場所を祭祀の場とする意識を、その後の人々も持っていたことを示しているのもであると思われる。

今回の調査において検出された遺構・遺物は少なく、多くの想像を交えたまとめとなってしまった。しかし、少ない遺物のなかで、滑石製垂飾りの出土は特筆されるものであり、その存在がこの千羽地区の歴史のなかでどのような意義があるか興味深い。今後の類例の増加に期待したい。

報告書抄録

ふりがな	おおたにこふんぐん							
書名	大谷古墳群							
副書名	J A 掛川市緑茶加工施設用地造成事業に先立つ緊急発掘調査報告書							
編著者名	大熊茂広							
編集機関	掛川市教育委員会							
所在地	〒436 静岡県掛川市水垂 5 1 番地 TEL0537-24-7773							
発行年月日	西暦 1994年 3月 31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおたにこふんぐん 大谷古墳群	しずおかのけんかかげがわし 静岡県掛川市 せんぼあびおおたに 千羽字大谷	22213	—	34度 48分 11秒	138度 3分 22秒	19930712 ～ 19930824	640	J A 掛川市緑茶加工施設用地造成事業に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
大谷古墳群	墓 古墳? 祭祀?	弥生時代後期～古墳時代初頭 古墳時代 古墳時代前期?	土壇墓 溝	1基 2条	弥生時代後期～古墳時代初頭土器壺 1 土師器 滑石製垂飾り 1 滑石製管玉 2	埋葬主体部の検出なし 滑石製垂飾りは欠損あり		

大谷古墳群

J A 掛川市緑茶加工施設用地造成事業に
先立つ緊急発掘調査報告書

1994年3月31日

編集発行 掛川市教育委員会
掛川市水乗 51
TEL (0537) 24-7773

印刷 株式会社 彩光堂
掛川市宮脇248-1
TEL (0537) 24-0013